

平成29年度 地域自立支援協議会交流会（全体会①）

《パネルディスカッション》

「地域の強みを活かした協議会を目指してー実践報告から考えるー」

＜コーディネーター＞

東京都自立支援協議会 会長 岩本 操 氏
（武蔵野大学人間科学部人間科学科 教授）

＜パネリスト＞

足立区自立支援協議会 事務局 佐藤 佳代 氏
（足立区障がい福祉センター 地域生活支援担当係長）
昭島市障害者地域支援協議会 副委員長 高橋 知子 氏
（特定非営利活動法人在宅福祉サービスウイズ 理事長）

会長：

- ・ パネルディスカッションは後半のグループ討議とつながっている。前半のディスカッションの内容を発題として、後半のグループ討議で皆様の意見交換につなげていただければと思っている。
- ・ 最初に私の方から東京都の自立支援協議会の今年度の計画と第一回本会議の内容についてご紹介し、そのあと佐藤さん、高橋さん、それぞれ地域の協議会の活動報告をしていただく。
- ・ 後半20分くらいで3人でやり取りをさせていただいて、それぞれ足立区、昭島市の強みをお2人に挙げていただいて、グループ討議につなげていきたいと考えている。
- ・ 今回の交流会はまさに「都と地域の協議会活動の双方向性を強化し、東京における地域課題を考える」という今期の東京都自立支援協議会のテーマと直結している。
- ・ 私自身、平成21年より武蔵野市の地域自立支援協議会に関わらせていただいているが、武蔵野市でやっていてなかなか東京都の協議会の役割というのが見えてこなかった。また、私たちの生活は、1つの自治体で完結しないでいろいろなところに生活圏がある。そうするとやはり広域で考えること、情報の共有がもっと必要ではないかと考えることが多々あった。
- ・ 東京都の協議会としては、東京都と各自治体がもっとつながるような、そしてそれぞれの地域の協議会がもっと活性化できるような役割があるのではないかと、ということで、今期第5期の協議会のテーマ設定をした。
- ・ そして初年度の協議事項は、「東京の協議会活動がさらに機能するためには何が必要か」とした。東京都では、島を除く全区市町村で協議会が設定されたということで、課題がいろいろ出てきているところもあろうかと思う。それを乗り越えて、次のステップに行くために、何が必要かということを考えたい。
- ・ 東京都自立支援協議会は交流会、セミナー、動向集という3本柱で活動してきており、今年度も同様。東京都として取り組む課題の検討をしていこうということで、今期は、地域の協議会の委員、あるいは事務局で活動されている方に委員になっていただいた。

- ・ 武蔵野市の協議会はブロック協議会があり、他地域との情報共有がとても参考になっている。そういったつながりをいろんなところで持ていくと、また新たな展開が期待できるのではないと思う。
- ・ 都協議会一回目の本会議では、いろいろな地域課題を挙げていただいた。委員を二つのグループに分けて、委員の皆さんが思っていることをとにかく挙げていただいて、共通する課題や地域の特徴と思えるようなことをお互い出し合って、見える化した。
- ・ この作業を通して、大別すると、複数の自治体に当てはまる地域課題と協議会活動、協議会の運営上の課題の2つが出てきた。
- ・ 地域課題としては、相談支援の質や量の問題や資源、特に住まいの問題、権利擁護、虐待、それから障害の分野だけではなくて高齢分野との連携ということが複数挙がった。また、切れ目のない支援、医療的ケア、教育支援、就労支援といったものも挙がっている。更にマンパワー、人材確保、人材育成、ということも多く自治体から挙げられている。
- ・ 協議会の活動上の課題、運営課題については、協議会の役割が曖昧であるという意見があった。参加者の要求の場になっているけれどもそうなのだろうか。計画策定や施策との関連で、一体協議会は何をするのか、というような問題も挙げられている。
- ・ 地域の課題というのは広範囲で非常に難しい課題が多くあるので、なかなか課題が挙がっても深められない。それをどうしていくのか。マンパワーとか人材確保というのはもっと広域とか都のレベル、あるいは国レベルで考えていくべきだが、そういうものと市区町村単位で取り組む課題が一緒になっているので、あれもこれもやらなくてはいけないというような負担感みたいなものが出てきているのではないかと。抽出できた課題をどのように具体化させるのか。
- ・ 自分たちがやっていることが今ひとつ見えてこない。ほかの協議会がどういうことをやっているのか見えてこない。協議会のテーマや課題は地域間で共通するものが多いので隣接市との連携が必要ではないか。
- ・ 私達の生活や障害者福祉を考えた時も、やはり1自治体での限界ということがあるのではないかと。自治体ごとに協議会の性格が異なるのは悪いことではない。協議会というのはどういう役割を担うのか、そして市区町村単位の協議会というのは、こういったところをターゲットにするのか、そういった整理というものは必要なのではないかとということが本会議の討議で見えてきた。
- ・ そしてもう一つの課題は協議会の構成、組織の問題。専門部会でやっていることがなかなか全体の課題として、全体に共有されにくいという協議会も複数あった。専門部会で挙げられた課題を整理しまとめて全体に挙げていく過程がどうも難しい、その道筋がうまく持てない。効果的な専門部会の構成とはどういうものかということだと思う。
- ・ もう一つは協議会の構成、メンバーの構成。当事者の参加が進まない。当事者の意見とか当事者のパワーは協議会活動の要になってくると思うが、そこに課題を抱えている協議会があるということが挙がった。そこはどこも言えることではないか。
- ・ メンバーがいつも同じ顔触れという課題もある。いろんな会議のメンバーがいつも同じような感じになってしまっていて、一部の人に負担がかかっているのではないかと。協議会をけん引していくリーダーがなかなかいない。参加する事業所間で協議会への期待度など温度差がある。

協議会のメンバーにはサービス提供事業者のスタッフが入っていると思うが、法人事業所間でこういった位置づけで協議会活動をするのか、かけるエネルギーの違いもある。

- 今日は、足立区の佐藤さんと昭島市の高橋さんにご協力いただき、地域の強みを生かした協議会について実践報告をしていただく。

他を知ること自分たちを知る、共通点と特徴を知る、1自治体でできること、他の自治体と連携してできること、広域で考えるべきことというのをここで整理する機会があったらいいと思う。そして課題を重層的に見立てるような機会になればと思う。

（足立区 佐藤氏）

- 足立区の紹介：足立区は東京23区の最北端。埼玉、荒川、葛飾と隣接している区。面積は大田区、世田谷区に次いで第3位の広さ。人口は平成29年3月現在で68万1192人、高齢化は24.4%。区内に3つの特別支援学校と5つの大きな精神科病院を抱えており、障害者の数は23区で一番多い。
- 足立区障がい福祉センターについて：愛称はアシスト。障害児・障害者の自立と社会参加を促進するために様々な専門相談、評価、判定や訓練などの機能を備えた障害児・障害者専門の中核機関として平成15年の4月に設置された。事業は大きく分けて相談事業と通所訓練事業。私が仕事をしているのは自立生活支援室という相談事業の部門で、一般的な相談から計画相談、平成24年4月より基幹相談支援センターの機能も担っているのでセミナーの実施等、色々な仕事をしている。
- 足立区の自立支援協議会は、障害福祉センターと本庁にある障害福祉課、中央本町地域保健総合支援課の3つの課が事務局を担っている。アシスト内の事務局は、全体会の事務局は自立生活支援室、専門部会の事務局はアシスト内の通所訓練事業それぞれの部署が担っている。
- 現在の足立区の自立支援協議会の概要について：平成19年3月に設置されて丸10年の節目を迎えている。区直営。全体会の委員の構成は資料のとおり。委員長は筑波大学院の小沢先生にお願いしており、委員は区長が委嘱して任期は1年という形でお願いしている。
- 現在の協議会イメージ図：専門部会は9つ。それぞれがアシスト内の部署を事務局として活動している。専門部会は、協議会が設置される前からアシストの各部門の部署の事業として関係機関のネットワークという形で存在していたものを、協議会を設置する時にそのまま専門部会として位置付けたもの。足立区の特色だと思う。もともとあったものなので、参加団体、参加団体の数、活動の回数、活動の内容についても各部会まちまちで、活動頻度も毎月から年2回まで様々。また、高次脳機能障害関係機関連絡会という部会のように一つの障害に特化した部会もあれば、足立区就労支援ネットワークのように3障害の事業所、区内の事業所の全てに声をかけて活動しているという部会もある。
- 足立区地域自立支援協議会の現行の流れ：個別支援会議等で挙げられたものがそのまま専門部会に上がって、専門部会の中で話し合われた課題等がその次の定例会へ持ち込まれる。事業所の活動が多いけれども、事業所の実務担当の責任者レベルで構成した定例会で一度その内容について精査して、そこで精査したものを関係機関の長で構成される全体会に挙げていくという流れになっている。個別の課題を全体の課題にということで各専門部会で挙げられた課題を

定例会で、区で取り組むこと、それから事業所同士で情報共有をして事業所同士で考えていくこと、というように内容を精査していくようになっているが、なかなかそこが難しくて全体会まできちんと挙げられていない、というのが現状の課題となっている。

- 足立区の協議会の特色と課題について：元々協議会設置以前から存在するネットワークを専門部会に位置付けたというところに足立区の特色がある。ただ運営の仕方がバラバラで、統一されていない。自分たちが自立支援協議会の一員なのだという意識についても各専門部会ばらばらで統一されていないという課題も見えてきた。他にもいろいろ課題が見えてきたので、それをまとめてみた。
- まず9つの部会が取りまとめた課題を、全体会に挙げていくというのが時間的に難しい。時間短縮のために、委員の方に事前に報告書を送ってみたり、課題だけをまとめて資料にし時間短縮を工夫してみたが、やはり全体会に課題を確認して協議するところまでもっていくのが難しく、結局、報告で今年もこんな課題が出たで終わってしまっているというのが現状。
- 2つ目は専門部会がもともとのネットワークで、関係機関が集まっているので、活動内容が一つの障害に特化していたり、内容が一つのことで専門的な話になりすぎて、いざ定例会や全体会で挙げた時に、障害の種別や立場を超えて課題を共有するのが難しい。全体会委員から、どんな風に自分が意見を述べればいいのかかわからない、もっとみんなが共有できる課題はないのかというご意見をいただいていた。区で取り組む課題なのか、みんなが共有すべき課題なのか、委員の皆さんに十分に協議していただけることを検討していきたいと思っている。
- 3つ目は、事業所が中心なのでなかなか要望の場となってしまう部会があること。もちろん意識を持って活動してもらっている部会もあって、その都度貴重なご意見をいただく部会もあるが、意思の統一というのはなかなか難しいと感じている。
- そういう課題については来年度に向けて新しく見直しましょう、ということで、今動いている。全体会の委員について、今までは特別支援学校だけだったものを、地域の保育園や幼稚園や小中学校入れてみたり、よりいろいろな立場の方から意見をいただけるように全体会の委員を少し追加していきたいと思っている。
- 一番大きな見直しは専門部会。暮らし部会、働く部会、子ども部会、相談支援部会、権利擁護部会、精神医療部会の6部会とする予定。各専門部会には、いろいろな立場の方から選出したメンバーで、障害のある方が地域で生活するという視点でいろいろなご意見を協議できる場にしたい。
- 各専門部会の部会長には全体会の委員にもなっていただこうと思っている。今までは、専門部会と全体会のメンバーというのはバラバラな感じだったので、それぞれの部会の部会長には全体会の委員になっていただき、それぞれの部会の課題を直接全体会に挙げていただくことで、全体会と専門部会のつながりを持たせていきたいと考えている。
- 今のところ暮らし部会、働く部会、子ども部会、相談支援部会についてはアシストの関係する部署で事務局を持つ予定。権利擁護部会は差別解消支援地域協議会の機能を担うために、本庁機能の障害福祉課が事務局を担う予定で、精神医療部会については精神障害者地域協議会の機能を担うために、衛生部の中央本町地域保健総合支援課が担うことになって、それぞれが事務局になって今後の進め方を検討していく予定となっている。

- また、各部会で出されて全体会に挙げられ、全体会で協議された内容については、区の事務を所管する部長に報告を提出するという道筋を明確にし、話し合われたことが確実に区に報告されているという形は作っていきたいと思っている。現行の専門部会については自立支援協議会とは切り離し、必要なものについては新たにネットワークとして残していきたいと思っている。
- これからの予定：見直しについては7月10日の全体会で郵送されていて、今要綱やメンバーの選定について動いている。スムーズに協議できる準備、事務局の力量が問われるので緊張している。
- 最後に自立支援協議会を直営で運営するメリット。足立区は障害者、団体、事業所の数も多いので、区が事務局を担うことによって特定の障害や団体に偏ることなくトータルな視点で運営することができる。また、報告するルートを確保して施策につなげやすいというところがメリットだと思う。このような見直しを行い、より良い協議会にしていきたいと思っている。

（昭島市 高橋氏）

- 昭島市の紹介：昭島市は、多摩西部、立川市に隣接している。東西には青梅線が走っている。人口は11万2千850人、手帳所持者は資料のとおりになっている。クジラは昭島市のキャラクター。
- 昭島市の協議会について（組織図で説明）：昭島市には協議会が2つある。昭島市障害者自立支援推進協議会は平成18年設置。目的は、障害福祉計画策定に関する事項について調査審議。それから昨年4月新設の昭島市障害者地域支援協議会、こちらは地域の実情に応じて障害者の支援体制の整備を図ることを目的にしており、全体会と事務局会議と専門部会で成り立っている。事務局会議は専門部会から出た課題を調整する場。事務局は全て市役所の障害福祉課が担っている。会議体が2つあるので肝になるのが真ん中に書いてある連携、連携というと非常に具体性に欠くというところで私達はその上に懇談会をしようと懇談会を作った。障害者の情報の共有化や意見交換をする場として、9月の末に第1回の懇談会を開く。
- それぞれの協議会について：まず自立支援推進協議会。こちらは条例設置で平成18年1月に設置。目的は障害福祉計画の策定に関する事項の調査審議、委員構成は資料のとおり。この推進協議会は会議体がひとつで、継続して障害者の課題について検討するというシステムになっていなかった。そこで昭島は、平成20年10月に昭島市地域支援会議を要綱設置で作った。自立支援推進協議会と連携を図る中で、障害福祉計画に関する事項の調査・検討とあるので地域支援会議は、推進協議会の下部組織としての位置付けだった。委員は昭島市には昭島市障害者児福祉ネットワークという当事者団体や事業所、社会福祉協議会でやっているネットワークがあるが、そこから推薦した者が6名、それから自立支援推進協議会が1名。この当時は大変行政の壁が厚く、なかなか本来あるべき協議会については進まなかった。
- そんな中、私達は手弁当で毎月1回会議を開いて課題の整理等を話し合った。その取組の成果が「昭島市地域支援会議 調査、研究のまとめ」。そしてこれを推進協議会に報告した。その後、約5年かけてやっと昭島市障害者地域支援協議会が昨年4月に設置された。これも要綱設置。目的は総合支援法第89条の3に規定された協議会で地域の実情に応じた体制の整備等に

ついて協議を行う、となっている。委員構成も実際に現場のことがわかる者達、ということで全体会の推進協から1名、関係機関、団体、福祉・医療・教育・雇用の従事者支援施設、それから障害当事者、障害をお持ちのご家族、各専門部会から1名ずつという15名から構成。委員長に聴覚に障害のある方が選出されたので、その情報保障として、意見を言うときは必ず手をあげて名前を名乗ってから言う、1人の人が意見を言っている時には横から口を出さない、手話通訳の方が手話通訳できない「その」とか「あの」とかという言葉は使わないなど、情報保障を徹底した。全体会は知的障害の方も委員に選出されたので、その方については、事前にオリエンテーションをして説明し、当日もお隣にサポーターがつき、終わってから振り返りなどもしている。

- 活動内容は全体会3回、事務局会も3回行っている。各専門部会は、適宜会議や研修、視察等を実施している。相談支援部会は「相談支援事業所一覧マップ」を作成した。また、実態調査でどこに相談したらいいかわからない、困ったときはここに相談というマップとして、昭島市内にある事業所をマップとして作成した。それから就労支援部会も大変活発に活動していて「就労啓発リーフレット」を作成した。
- 特筆すべきこととしてプロジェクトチームを2つ立ち上げた。1つは障害者差別解消法のパンフレット。こちらは全体にわたり障害福祉課の課長も含めて文章を作成し、障害特性については、障害当事者や専門分野の方が文章を作成した。事務局会議、全体会議で何回か修正を行って、今年度中に発行の予定。もう1つは地域生活支援拠点における、昭島市に必要な社会資源や機能等の洗い出しや課題等の調査・検討に取り組んでいる。
- 専門部会の取組についてはマトリックスを作った。私は相談支援事業所なので相談支援部会に入っているが、メンバーも相談支援事業所だけではなく、身体障害者相談員、知的障害者相談員、医療ソーシャルワーカー、後見センターの方とか高齢者の方の地域包括支援センターの方とか、市役所のケースワーカーや保健師さんにも入っていただいて、隔月で事例検討と学習会などを行っている。就労支援部会も大変活発で、昭島市で初めて市役所で実習が実施できたとか、特別支援学校は特例子会社などの見学をしている。生活支援部会はグループホームとかヘルパー事業所、日中活動は生活介護や地域活動支援センターの事業所などが入ってやっている。
- 地域生活支援拠点プロジェクトの取組について。プロジェクトチームが始まったのは2月末だが、その前に、厚生労働省のモデル事業をやっている八王子市にも視察に行き、八王子市の方を招いて学習会も行った。プロジェクトの目的は、国が示す地域生活支援拠点に沿って、昭島市がどのような機能と役割が必要なのかを明確にすること。課題のシートを作り、相談支援のコアメンバーが中心になり相談支援部会の部長がリーダーになり、あと各専門部会から1名と課長でメンバーを構成。拠点の課題に沿って専門部会がシートを記入し、それを拠点のプロジェクトチームで会議をして専門部会に返ししながら、全体会で承認されるという形を何回か繰り返した。地域生活支援拠点につきましては、プロジェクトチーム、横のつながりだけではなくて協議会全体で情報の共有化が図れた。今後の取組としては、9月の懇談会で議論して10月には完成を目指す。
- 昭島市の地域生活支援拠点に求める機能、拠点整備と面的整備という図を作成した。図の丸

いところが拠点にあったらいいというもの。相談支援体制の充実とあるので、今はワンストップ型の基幹相談支援センターだとか。昭島市は社会資源が少ない。短期入所も他市を使うようになってしまうので、短期入所も生活訓練もあったほうがいいとか、緊急一時保護事業は昭島市内にはないので、緊急時の対応は是非必要だということを資料の円の中に入れてある。それから四角でくくってあるところは昭島市内にある社会資源。特別支援学校は昭島にはないので、都立あきるの学園や村山特別支援学校などが載っている。枠の外にあるのは市内にない事業・システムとして書いてある。左側は関係機関が情報共有して調整会議を開いたり、昭島市役所内で庁内関係部署が積極的に関わる。もちろん本人ご家族が主人公であることには変わりない。

- 最後に地域支援協議会の成果と課題について。組織としてこれで自立支援推進協議会障害計画策定と昨年4月から始まった地域支援協議会の地域課題の把握の役割分担をすることができたと思う。発足1年目にして地域支援協議会は専門部会が大変活発に活動したので、全体会も動いた。地域の障害福祉の課題とあるべき姿についての方向性も示すことができたと思っている。それから、地域生活支援拠点のプロジェクトチームを設置したことで、専門部会で横ぐし、横のつながりという機能を発揮して要求課題の整理と情報の共有化を全体で図ることができたと思う。
- 昭島市の地域住民が協議会委員として参画したとあるが、これは議題にあった地域支援推進協議会の公募市民の方が、実は障害者の就労支援の専門家だったということがわかり、その方が協議会の就労支援部会やプロジェクトチームや全体会にも委員として参加して、大変重要な知恵とアイデアをいただけたということ。

私の感想としては、その方だけではなく、いろんな機会があればいろんな方が活躍できるなということを実感した1年だった。ただ、課題もたくさんある。専門部会は昭島には8つあるが、権利擁護部会はまだ未設置。専門部会の数が多いために全体会で討議するのに時間を要する。これから再編又は統合という意見もある。2つの協議会の連携を具体的にどうしていくか、ということは私たち協議会の委員の質を含めて、今後課題になっていくのではないかと考えている。

- 障害福祉の課題解決や地域の取組は、予算措置が大変重要。昭島市は予算が少ないし、社会資源も少ないので、東京都の事業活用なども含めて喫緊の課題となっていると思う。

会長：

- これから残りの時間3人で少しやりとりをさせていただく。

足立区と昭島市それぞれの違い、特徴もあり共通する課題も挙げられた。足立区は行政が協議会を引っ張っていくというところに、特徴があると思う。もともとあったネットワークを専門部会というところに持ち上げようというところでいろいろご苦労されたということだが、何のための協議会なのか、というところを共有することが大変だったのではないかとと思う。行政直営だからこそこれだけ大きく変えられるのだと感じるが、これまでのことを活かしてどう新しい組織を作っていくかということのご報告だった。

- 昭島市の方は、地域支援協議会がいわゆる地域推進協議会の役割を担っている。今の自立支援協議会は、草の根的に地域で活動していたグループが発展して、昨年度から協議会として組

組織化された。新しくリフレッシュして活発に活動した1年、プロジェクトが各専門部会を繋ぐ役割を担っているというところで新たな今後の展開が期待できるというご報告だった。

- ・ もともと国が示した協議会のイメージ図というのはボトムアップ的な組織図であるが、なかなか個別支援会議や専門部会から地域課題を抽出、全体へというような流れが難しいというところが報告にあったと思う。何が難しいのか、どういうことがあれば個別支援から全体の地域課題へ繋がっていくのか。そしてもう一つ、果たしてボトムアップの形が協議会としていい形なのか、ということをお聞きしたい。

佐藤氏：

- ・ 足立区は専門部会の数が多く、なかなか協議まで至らなかった。また、部会の内容をそれぞれのところで共有できるようなメンバーを選定していなかった。専門部会で話されたことを十分に理解した上で全体会に協議してくれる方がいない、というところは足立区独特の課題だと思う。下から上がってくるというのは大切なことであるし理想だと思うが、それを取りまとめて共有していくというのはとてもエネルギーがいること。今回の見直しの中で、全体会の報告事項をある程度絞ったうえで、専門部会での話を全体会にあげていくという方法もあるのでは、と話している。

高橋氏：

- ・ 私は相談支援部会に所属しているが、事例検討をしても個別の対応に追われてしまって、それを地域の課題として捉えるところまではなかなかいきにくい。地域支援協議会というのが政策提議するところ、という意識もなかなか見えてこなくて、要求の場になってしまうこともある。

地域生活支援拠点や差別解消法に取り組みプロジェクトチームを作ったことで、全体を見渡すマネジメントはできたとは思いますが、課題を下から上げて、整理して地域の課題として挙げる、というところまでは至っていない。課題解決のための取組というのはなかなか難しい。ボトムアップという部分では、昭島の場合はこれからだと思う。

会長：

- ・ 私も武蔵野市でやっていて感じたところだが、この図のようにはなかなかうまくいかない。たくさん挙げた課題をどうまとめていくのか。ある程度課題を焦点化して、それを各部会やチームで検討する方法もある。高橋さんのところでは地域生活拠点のプロジェクトチームが各専門部会を繋げた。そういった仕掛けが必要という感じもする。
- ・ 実際挙げってくる課題で、足立区とか昭島市の単位ではなくて、他と連携して取り組みたい課題だと思うようなものはあるか。

高橋氏：

- ・ 昭島市だけで無理なら東京都の単独事業も使ってみるということでは、もう少し広域的な目で見えていかないといけない部分もある。それは行政の方もそうしていただきたいと思う。

佐藤氏：

- ・ 私は相談支援部会に入っているので、その中でよその区のことを聞いたりすることもある。そういったところで連携がとれるといいという話は出ている。

就労の専門部会は、足立区だけでなく近隣の荒川とかその近辺の事業所を巻き込んだ勉強会をやったりしているので、それぞれの専門以外の専門部会で持っているもので、利用できるものがあればいいと思う。

会長：

- ・ 武蔵野市でもヘルプカード・ヘルプマークということでずっと活動をしてきたのだが、他の自治体でもそれぞれちょっと違う切り口から活動しているので、こういったところで繋がりをを感じる。

こういう東京都の交流会がひとつのきっかけになって、情報共有につなげていけるといいと思う。

- ・ 先ほど佐藤さんから、専門部会から全体会へ繋がらなかったのは、協議会の構成メンバーにつなげられる人がいなかったというお話があったが、協議会の活動を担うマンパワーはどういう人材が必要か。マンパワー上の課題はあるか。また、都の本会議では当事者参画がなかなか進まないという課題があったが、その点はどのような状況か、課題と今後こうあったらいいということを含めてご発言いただきたい。

高橋氏：

- ・ 昭島のどの会議に出ても、金太郎飴のようにメンバーが同じ、ということはある。去年1年間で私が感じたことは、地域生活支援拠点PTで若い人が力を発揮した。やる機会があれば活躍できるし、そういう機会があったことで、凄いまとまりが生まれた。そういう方たちが活躍できる場の調整も今後必要となってくる。また、昭島には当事者部会があるが、いろいろな障害種別の方がいて、個人的にいろんなご意見を持っているとなかなかまとまりにくいところもある。
- ・ 個人的には各専門部会に当事者の方が入ればいいと思う。地域生活支援拠点PTの時には当事者目線で意見を言ってもらうチャンスというのを作った。当事者部会、防災部会は当事者の方が入っている。全部会に当事者がいる方がいいと思うが、昭島市は推進協議会に当事者枠がない。新しい会議体の時には当事者部会を作ろうということで当事者部会を作ったのだと思うが、それは昭島の今後の課題。

佐藤氏：

- ・ いろいろな会議で同じ方にお会いすることが多い。区が事務局を担うメリットもあるが、区だけがどんなに頑張ってもいいものは出来ないと思っているので、民間の活力、民間の中から力のある方を探していきたいと思っている。いつも同じような方ばかりではなく、それぞれの部署がネットワークで情報を持っているので、情報を集約して一緒にやりましょうと言って盛り上げてくれる方々のメンバー選定をこれからしていきたいなと思っている。

会長：

- ・ 若い人を育てるところはやはりあると思うので、新しい人を巻き込んで何か役割を持ってもらうというところから広げていく、ということが必要。
何のための協議会なのか、ここは何をすることでいいのか、ということを確認していくということがとても大切なのではないかと、お2人のご報告とご発言を聞いて感じた。
- ・ 最後に、自分たちの地域あるいは協議会の強みと、それぞれ昭島市は足立区、足立区は昭島市の活動内容を聞いて取り入れてみたいこと、その2つをキャッチコピーで挙げていただきたい。まず強みから。

佐藤氏：

- ・ 足立区の強みは、区が事務局を担っているというところで現場も知っているセンター、団体とのつながりのある本庁機能が事務局をもつことによって「日頃からのつながりを活かした協議会」

高橋氏：

- ・ 「専門部会と深掘りとプロジェクトチームの横ぐしの取組」

会長：

- ・ では、取り入れたいことは。

佐藤氏：

- ・ 区の中にあるいろいろな力を活かした協議会にしたいと思っているので、民間の底力、ということで、力のある方の発掘のいろいろな極意を取り入れていきたいと思っている。

高橋氏：

- ・ 足立区は専門部会を29年度統合するとお聞きした。昭島市も今後再編が必要だと思っているので専門部会の統合の進め方についてお聞きしたいと思う。

会長：

- ・ このように一言で自分たちの強みや今後の課題を掴んでいただきたいということで、後半のグループ討議ではそれぞれの協議会の内容等を共有して、自分たちの強みと取り入れたいこと、キャッチコピーを各協議会で設定していただきたい。